

中世王国年代記に現れた「政治的眞実」

—最近の研究から—

鈴木 道也*

キーワード：歴史叙述、年代記、サン＝ドニ修道院、国家史、詩的眞実

はじめに

多様な歴史認識が交錯する中世社会にあって、権力体としての国家の成長と変容は、「歴史家」たちの語りをどう変えたのであろうか。また歴史叙述に携わる当時の知的エリートたちは、どのような意識と方法論をもってそれぞれの史書を組み立てていたのであろうか。いわゆる「言語論的転回」以降の歴史学をとりまく状況のなかで、ナショナル・アイデンティティ形成史の観点から、前近代の歴史叙述が果たした社会的機能に対して大きな関心が寄せられてきた¹。かかる関心はヨーロッパ史研究にのみ限定されるものではなく、広く歴史学界全体で共有されている²。そしてこれらの研究はいずれも、「国家史」がその時々の政治社会環境の変化を敏感に反映させながら、長い年月を経て多層的なものとして織り上げられてくる具体的な過程を明らかにしつつある。

しかしながら、前近代ヨーロッパの歴史叙述を対象として最近フランスで出版された二つの論集（『詩的眞実と政治的眞実』、『年代記の詩学』）は、中世の歴史叙述を政治的な詩作と捉える視点に立つことで、歴史学が積み上げてきた文献学的研究の成果と近年の文学理論におけ

る様々な議論を融合させ、中世年代記研究の新たな方向性を拓きつつあるように思われる³。本稿では最近のこうした動向に示唆を受けつつ、中世の史書が過去を叙述する際のスタイルについて、13世紀後半にフランス王国で成立した俗語版王国年代記『王の物語』（あるいは『フランス大年代記』）を題材に考えてみたい。なお、『王の物語』に限らず中世史書の分析に際しては、つねにその編纂、競合、普及、再編の各局面に着目して慎重に検討を進めることが求められるが、今回は史書編纂における基本姿勢の確認が目的であることから、主としてその編纂面に限定して考察するものとする⁴。

1. 俗語版王国年代記の史学史的 위치づけ

（1）近代歴史学における『王の物語』の史料価値

現在は『フランス大年代記 (Grandes Chroniques de France)』と称されることの多いこの歴史書は、成立当初は「王の物語 (Romans des Rois)」と呼ばれていた。14世紀後半から15世紀にかけて多数の手写本が制作された後、シャルル7世治世までの記述を含む部分が印刷業者パキエ＝ボノムの手により1475年から1477年にかけて『サン＝ドニの大年代記 (Grandes Chroniques de Saint-Denis)』のタイ

* 埼玉大学教育学部社会科教育講座

トルで出版されるが、これはフランスにおける最初の俗語印刷物であった。このことはフランスにおける活版印刷術の歴史を考えるうえで非常に重要な意味を持っており⁵、その後もこの作品は1493年、1514年、1517-18年と短期間に三度刊行されている。出版を手がけた書籍商たちが、この作品を同時代の読者が求める「人気の読み物」として高く評価していた様子がうかがえる⁶。当初『王の物語』というタイトルを付されていたこの史書が、写本制作が活発化する14世紀段階で『フランス諸王年代記』と呼ばれるようになり、次いで『フランス王の事績録』とされた後、出版時点で『フランス大年代記』という名前を与えられていく。「王」の「物語」が、「フランス」の大いなる「年代記」とみなされていくそのプロセスのなかにも、この作品がそれぞれの時代において有してきた意味の変化、そしてまたその大きさを考える手があるように思われる。しかしこうした過程を脇に置いて、近代歴史学のなかで中世の年代記が史料として果たしてきた役割はきわめて小さかった。そこに描かれる多くの誇張や「虚構」は、これまでその史料価値を低めるものとされてきた。そのため全体として年代記の性格が検討されるというよりは、そこに含まれる「歴史的事実」を抽出するための一素材という扱いしか受けてこなかったのである⁷。

そうしたなか、中世人の歴史観や世界観を分析する史料として年代記の可能性にいち早く注目したのがベルナル＝グネやガブリエル＝スピーゲルであり、彼らが主たる分析の対象として選んだのが、サン＝ドニ修道院とそこから生み出された『王の物語』を含む史書群である⁸。フランス王権との結びつきが強いサン＝ドニ修道院は、真贋は定かではないものの、シュジェールの鷲、ロランの角笛、ダゴベールの玉座、聖エロワの十字架、シャルルマーニュのチェス駒など多くの至宝を抱えていた⁹。国王神話の保護者であり、最初の御用史家でもあったサン＝ドニの修道士たち¹⁰のプロパガンディストと

しての活動は、伝記、事績録そして年代記といった文芸面にとどまらず、歴代国王の墓所として、あるいは中世ヨーロッパを代表する教会建築の建立など、様々な儀礼的表象的側面においても展開された。同時代の修道院でここまで王家そしてその統治イデオロギーに接近して叙述活動を展開した修道院は他にはいなかった。したがってその史書編纂事業には一定の計画性があったと思われる。とするならば、歴代諸王に関する個別の「伝記」という体裁をとらず、また「年代記」という形態としてはすでに存在していたラテン語年代記に依拠しつつも、あえて記述言語として俗語を選択した『王の物語』は、一連の事業のなかでどのような役割を与えられていたのだろうか。

(2) 中世歴史叙述におけるラテン語史書集成の史料価値

『王の物語』とほぼ同時期に編纂された俗語版年代記として、13世紀中頃にルイ9世の弟ボワティエ伯アルフォンスのもとにいた詩人が作成した『ボワティエ年代記』と呼ばれる史書がある¹¹。サン＝ドニ修道院のプリマによる事業遂行に先行して1250年から1270年にかけて行われたボワティエ伯下の訳業では、サン＝ジェルマン＝デ＝プレ修道院のラテン語史書集成を原典としているが、無数の省略や要約、そして意訳が施されており、かなり自由な翻訳活動が行われていた。この点においてサン＝ドニの事業とはその編集姿勢を異にしていると思われる。ここでは両書の書き出し部分からそれを確認してみたい¹²。まず『ボワティエ年代記』では、

「いと良きキリスト教徒にして勇敢なる人物、そして親愛なるわが主ボワティエとトゥールーズの伯に対して、その臣下にして、僕そして詩人である私が、彼、ならびにイエス＝キリストを称えるべく、ここにラテン語からフランス語に訳された〈oeuvre〉を贈る。」¹³

という序文から始まる。これに対して『王の物

語』では、

「この〈hystoire〉を読む者全てに、そしてわが主に挨拶を送る。ここにこの作品(ouvre)が始まる。多くの者がフランス王の家系に、すなわちそれがどこに由来し、またいかなる系統より生まれ出るのか、という点について疑いを抱いているので、疑いようもなく高きお方の命によりて、この作品を作ることが企画された。この〈hystoire〉は、諸々の歴史(hystoires)や全ての王の事績が記されたフランスのサン＝ドニの修道院の〈lettre〉や〈croniques〉の構成に従って記される。なんとなれば、我々はそこから〈estoire〉の源を汲み出さなければならないからである。¹⁴⁾

と記されている。ここでは訳業の背景と意図が説明されるとともに、典拠史料とその翻訳である『王の物語』との関係が示されている。「年代記」を意味する〈cronique〉という語は、典拠となるラテン語史書を指しており、自らが編纂している作品(ouvre)は、歴史(histoire)ではあったが、〈cronique〉ではなかった。年代記(cronique)とは、歴史を汲み出す源泉となるべきものであり、フランス語で記された『王の物語』の内容にお墨付きを与えるラテン語史書を意味していた。歴史的事実と乖離していることを理由として近代歴史学が退けたはずの王国年代記が、実際にはこうして典拠史料の真正性にこだわっていたことは興味深い。もっともフランス語史書は、ラテン語テキストを逐語的に訳すことで満足していたのではない。間違いなくそこには、彼らのロジックに沿った書き替えが行われているのである¹⁵⁾。また

「もし他の教会の〈croniques〉のなかに、この訳業と異なるところを見つかることがあれば、その文献(lettre)の真の正しさ(pure verité)に従って、混乱をきたすものでなければ、何ら削除することなく、また支障をもたらすことがなければ、何ら加筆を加えることなく、それを本文に加える

ことが出来るだろう。」¹⁶⁾

という記述にも見られる通り、内容の「正しさ」を条件として広く証言を求めるとしながらも、それが混乱や支障をもたらす場合には、それを削除したり加筆する可能性もあるとしている。

ラテン語史書の利用は、ここではあくまで編纂主体にとっての「政治的真実」を証すためのものであった。権力秩序の多様な編成原理のなかで特定のものを正統化する意図のもとで構想され、一定の筋立てに沿って「政治的真実」の物語が構成されている点において、その叙述は、聖書とも、また現代の歴史叙述とも相通じるものである。『王の物語』は、以下見るように歴史は神意ではなく人意によって織りなされるという基本認識に立ち、聖書的世界観とは決定的に異なっている。しかし他方でその叙述スタイルにおいては、ひと続きの系譜的な物語として王朝史を編んでおり、すべての出来事が救済史的な観点から解釈・定位される聖書と同様に、そこに歴史の偶然性や不確実性といったものは入り込む余地はない。すべての過去は独立した個性を持たず、それぞれが役割を与えられてフランス王朝の現在を肯定するものとして配置されているのである。それは歴代の王たちを、永遠に連続する王朝物語を彩る一人の役者の位置に据えること、ポール＝リクールの表現に従うならば「筋立て」に沿った登場人物として位置づけることを意味している¹⁷⁾。歴史の動因としての人意の強調と系譜的連続性への傾注、『王の物語』の叙述を特徴づけるこの二つの特徴について、以下の二つの事例から確認してみたい。ひとつはメロヴィング期クロヴィスの改宗を巡る記述であり、もうひとつはルイ敬虔帝治世を巡る記述である。

2. 「クローヴィス改宗」とその歴史的位置 に関して

(1) 叙事詩的世界観とキリスト教的世界観

中世初期ヨーロッパの歴史叙述には、その基本的な歴史認識において二つの系譜を確認することができる。ひとつはウェルギリウスの『アエネーイス』に代表されるような、異教的世界における政治的指導者の英雄的行為とその支配の正統性を記す叙事詩的世界観であり、もう一つは、カエサルやエウセビオスによって様式化され、ヒエロニムスやオロシウスらに継承されていったキリスト教的世界観にもとづいて天地創造から終末までを神の摂理によって説明していく『世界年代記』の系譜である。結論を先取りして言えば、『王の物語』は前者を内容的な軸としつつも、後者の叙述スタイルを継承している。メロヴィング王朝期に関する記述を例に、この点を明らかにしておきたい。

13世紀後半に成立する『王の物語』の冒頭部からメロヴィング王朝期にかけての記述は、直接的には13世紀初めから半ばにかけてサン・ド

ニ修道院で編纂された二つのラテン語年代記集成（[Vatican, Reg.lat.550]、[B.N.lat.5925]）を翻訳の原典としている¹⁸。しかしそれ以前からサン＝ドニ修道院やサン＝ジェルマン＝デ＝プレ修道院では、これまで記されたフランス王権に関わる様々なラテン語記述史料を集成していく動きが見られる（たとえば [B.N.latin.12711] など）、その後13世紀の初めに、こうしたラテン語史書集成を下敷きにして、歴代フランク王の事績を伝えるフランス語版の年代記が、氏名不詳ではあるがおそらくサン＝ジェルマン＝デ＝プレ修道院の関係者の手によって初めて編纂されている（[Vatican, fonds Reine, ms.624] および [Chantilly, MS.869]）¹⁹。

この『シャンティイの年代記』であれ『王の物語』であれ、俗語年代記の原典となったラテン語年代記集成は、そのなかに過去に記された複数のラテン語史書を含んでいる。代表的なものとして、トゥールのグレゴリウスの『歴史十書』²⁰、作者不詳の『偽フレデガリウス年代記』、『フランク人の史書』および『フランク人の歴史』を挙げることができる（図1を参照）。こ

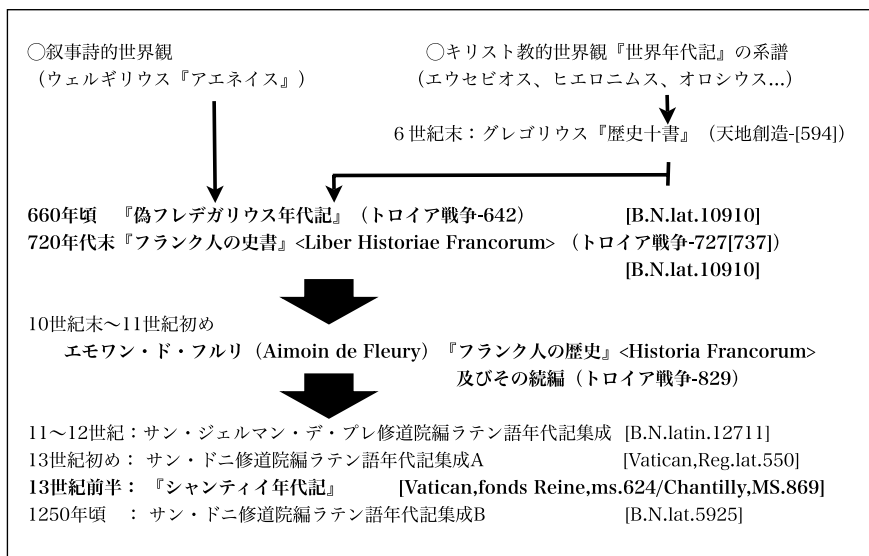


図1 『王の物語』の冒頭部からメロヴィング王朝期に関する典拠史料の系譜

これらの著作は、フランス（フランク）史のはじまりをどのように記しているのでしょうか。ここではクロヴィスの改宗を巡る記述が何を記し、何を記していないのか、その選択基準に注目してみたい。

（２）「人意」が織りなす王朝史としての初期フランス王国史

『歴史十書〈Historia Francorum〉』は、フランク王国における分王国体制が進行し、フランク人とは何か、ということが王国エリートの間で問われ始めた６世紀の末に著された。作品は全十書（４４３章）からなり、「第一書」で天地創造からトゥール司教聖マルティヌスの死まで記述した後で、「第二書」においてトゥール司教ブリクティウスの登位から王クロヴィスの死までを扱っている。ここでは、妻の強い勧めにより改宗を受け入れるクロヴィスを「フランク人の最初の王」と記しており、クロヴィスの改宗を画期として、フランク王権をキリスト教的、終末論的世界観のなかに位置づけようとする志向がはっきりしている。しかし他方で「フランク人たちの最初の王については分からない…」とのあいまいな記述も見られ〔第二書９章〕、彼以前に間違いなく存在していたメロヴィング家の「王」たちについて「この世代の者たちは、異教信仰に対して寛容であり、本当の意味で神を認めていなかった」と批判しつつも、その位置づけに苦慮している様子もうかがえる²¹。

次に取り上げるのは『偽フレデガリウス年代記』である。この作品では全四書中、５８４年までを記録する第三書までは『歴史十書』を典拠している。したがってその記述は基本的には教会史的であるが、ウェルギリウスの『アエネーイス』を引用することで、メロヴィング王朝のトロイア起源に初めて言及している作品としても知られている²²。そこでは、メロヴィング朝の歴代の王を「ポセイドンの子」メロヴィクスの子孫たちと表現したり、彼らの勇猛果敢な振

る舞いを詳述するなど、ウェルギリウスが描く叙事詩的世界の影響が色濃く認められる。しかしグレゴリウスがその画期性を強調していたクロヴィスの結婚に関しては、結婚成立の背景を側近たちの動向も含め詳述する一方で、妻クロチルドのカトリック信仰および改宗の勧めについては言及が見られず、クロチルドの役割はきわめて低い。ここではフランク王権の起源をキリスト教的世界観と関わらせつつも、異なる伝統を持つ神話的世界のなかに位置づけ、クロヴィスを含む歴代王の系譜的連続性と、個々の事績に高い関心を抱いている様子がうかがえる。

最後に紹介するのは『フランク人の史書』および『フランク人の歴史』である。『フランク人の史書』は、メロヴィング家の影響下でネウストリアの一修道士が制作した作品である。ここでは『偽フレデガリウス年代記』に沿ってメロヴィング王家のトロイア起源神話を採用しつつも、メロヴィング期のキルデリクス、クロヴィス治世については、妻クロチルドによる改宗の勧めのエピソードなども含め、フレデガリウス以上に『歴史十書』に依拠して詳述している。ただしその記述を注意深く観察してみると、洗礼を行う聖レミについての記述は削除されており、ランス教会の影響力拡大に対しては慎重な姿勢が見て取れる²³。

『フランク人の歴史』は、初期カペー朝成立後、王権の影響下で複数の年代記、伝記を制作したフルリ修道院のエモワンが編纂している。ここでは、メロヴィング王朝期については基本的には上で紹介した『フランク人の史書』を利用している。ただし、メロヴィクス、キルデリクス、クロヴィスの治世に関しては『偽フレデガリウス年代記』を利用している。したがって、クロチルドによる改宗の勧めに関する記述は削除されることになる²⁴。ここにおいてカペー王権は、歴史叙述の系譜として『歴史十書』ではなく、『偽フレデガリウス年代記』的王権観を採用することとなる。エレオノール・アン

ドリュエによれば、記述内容の微妙な変化のなかには騎士文学に先駆けた人物描写の出現を指摘することも可能であるとする²⁵。

その後『王の物語』はメロヴィング期歴史叙述の編纂、翻訳に際して、基本的には典拠としたラテン語年代記集成に取り込まれた『フランク人の歴史』（『偽フレデガリウス年代記』）を利用している。しかしその記述を詳細に確認すると、ここでも部分的な修正が施されていることが確認される。たとえばクローヴィスの結婚に関して、『偽フレデガリウス年代記』そして『フランク人の歴史』に存在していた詳細な経緯は、翻訳に際して省略されている。ここでは当事者二人の恋愛感情を結婚の大前提とし、対して結婚に反対するクロチルドの叔父ゴンドバルトの残虐性を強調する。そこではある種の人間劇が展開されている。信仰の違いとその後の改宗は、結婚後の二人の諍いの原因と和解の結果として描写されるのである。改宗はすでに救済史上の画期ではなく、王の治世を彩るエピソードのひとつに矮小化されているような印象を受ける。このようにして、教会史とは異なる伝統のなかでその形を整えてきた王国年代記は、『王の物語』のそのメロヴィング王朝史に関する部分について、それをはっきりと「神意ではなく人意」によって織りなされる王朝史話として示すことになった。

3. ルイ敬虔帝治世の位置づけを巡って

（1）系譜的連続性への高い関心

次に問題にするのは歴史的連続性への細心である。『王の物語』では、歴史を単線的で不可逆的なものとして描き出そうとする姿勢に基づいて、各王の治世は、その誕生と死が始まりと終わりをなし、その間の事績が時系列に沿って澁みなく記されていく。同時代を描く複数の史書は、基本的にはオリジナルがそのまま接合されており、そこから一定の基準に基づいた自由な取捨選択が行われるといったことはない。し

かしそれは単なる継ぎ合わせでなく、重複箇所を削除したり、欠落部分は補ったり、また原典における脱線したり過去にさかのぼる記述には注記が施されたりしている。ここでは原典からの翻訳に際しての記述内容の微妙な変化に着目してみたい。

たとえば、『王の物語』の原典となった一連の史書集成は、シャルルマーニュ治世に関してアインハルトの『カール大帝伝（*Vita Karoli Magni*）』を主たる文献に用いているが、この著作は、序文に続いてすぐにシャルルマーニュの事績に言及せず、まずメロヴィング朝の諸王そしてカロリング朝のペパンについて触れている。その理由について、著者であるアインハルト自身はとくに語っていない。しかし翻訳に際してプリマは、重複を好ましくないものと考え、立場から付言しておくことが必要と考え、「ここにおいて、我々の主へ受け継がれてきたことをより明確に示すために、先に言及してきた事柄について手短かに触れておくのが良いであろう」とわざわざ書き加えている²⁶。また、シャルルマーニュ治世後半から末期にかけては、次代のルイ敬虔帝の前半生に重なるが、ここでは「ここにシャルルマーニュの子にして、王そして皇帝となる温厚なるルイの生涯とその業績が始まるのであるが、その父が健在であるときにおいてはいかなる大きな業績も示していないので、ここでは先にシャルルマーニュについて語っておくことが望ましいであろう」²⁷と宣言することで、ルイ敬虔帝への言及を避けている。

この点、先に紹介した『シャンティイ年代記』はやや異なる。『シャンティイ年代記』に関しては近年、『王の物語』との類似性の高さが着目され、フランス王国における俗語版王国年代記の祖型をなす点において、作者不詳で写本数も数少ないものの、その歴史的意味が高く評価されてきた²⁸。しかしアンドリュエの最新の研究は、両者の訳文の違いに着目することで、むしろ両者の歴史（叙述）意識の相違、そして『王の物語』の画期性を強調する傾向にある。

近年の研究動向を支持してきた者の一人としては、今後詳細な分析を行う必要があると思われるが、ここではその主張に沿って、いくつかの点を指摘しておきたい。

例えば『シャンティイ年代記』では、シャルルマーニュ治世に続くルイ敬虔帝治世の記述に際して、連続性を明確にする観点から典拠史料の重複部分を整理したり、欠落箇所を補足しようとする意識が低いとされる²⁹。翻訳の典拠史料として通称「天文学者」による『ルイ伝 (Vita Ludovici)』と『シャルルマーニュとローランの歴史 (Historia Karoli Magni et Rotholandi)』(通称『偽テュルパン年代記』)が用いられているが、重複に関しては、両書に記された戦役が二つともそのまま記述され、戦没者名すら重ねて訳されている。また欠落部分については「私は歴史 (l'ystoire) のなかに、ここでどのようにして彼が生き、どのようにして統治したかについて見つけることが出来ず、歴史が語っていること以外はここに記すことは出来ないのである」として³⁰、記述に限界があることを率直に認めている。

これに対して『王の物語』の意識は明確であり、それが叙述スタイルにはっきりと反映されているという。このとき叙述の力点は、一人一人の王の事績や治世中の主な出来事の具体的な描写よりも、前後の王との系譜的連続性の説明に置かれている。この点からアンドリュウは、プリマの歴史認識は、王権と緊密に連携をとりながらこれまで修道院が著してきた「(王の)伝記」よりも、むしろ「教会史」のそれに近いと主張する³¹。異教徒との戦いを経てキリスト教教会の組織化が進んでいった4世紀から6世紀にかけて、エウセビオスの『教会史 (Historia ecclesiastica)』、オロシウスの『歴史 (Historiarum adversus Paganos)』、そして先述のグレゴリウス『歴史十書』に代表される、いわゆる「教会史」と呼ばれる歴史叙述の一ジャンルが形成される。そこにおいては、この世の歴史はキリスト教共同体の歴史として救済史観に沿

って価値が定められ、また歴史の歩みはキリスト教の勝利に向けた不可逆的なものとされる。かかる観点のもと教会史作者は過去の資料と証言を吟味して、「事実」を取捨選択し、そこに自らの経験を加えて歴史を記していく³²。その結果「教会史」においては、政治的支配者の存在はキリスト教の勝利に貢献する点においてのみ評価の対象となるのであって、個々の支配者の事績に画期的な歴史的意義を認めることはない。それはエウセビオスの『教会史』におけるローマの皇帝であれ、グレゴリウスの『歴史十書』におけるメロヴィング期の諸王であれ、例外ではない。

プリマの翻訳は、典拠としてグレゴリウスをはじめとする教会史家たちの著作を多用しており、フランス語化されているとはいえ、先例をなす『ボワティエ年代記』や『シャンティイ年代記』同様、その叙述において連続性の観点が前面に出てきている。しかしそこで重視されるのはキリスト教的なそれよりも、フランク(フランス)王朝の系譜的連続性であり、王位の継承、あるいは王朝の継承が持つ意味について微妙な修正が施されているとするのが、アンドリュウの指摘である。

(2)「祈る人」ルイ敬虔帝

その具体例として指摘されるのが、「天文学者」による『ルイ伝 (Vita Ludovici)』を用いてルイ敬虔帝治世を記す部分である³³。この作品が著された当時は、ルイ敬虔帝に象徴されるような聖職者的王権観が優越する時代であった。王は「祈る人 (orator)」であり、その世俗的軍事行動は常にキリスト教的ミッションの観点から解釈される。ここにおいては、剣を収め狩りや結婚といった俗事から距離を取る者こそ「良き王」であるとするような聖職者的王権観が優越していた。『王の物語』もそうした王権観を体現する人物としてルイを描き出している。すなわち、

「ルイはその幼少期にあっては孝心によ

って父に従い、自ら治めるアキテーヌ王国にあっては信心によって聖職者のごとき王として振舞っていた。父シャルルマーニュの死に臨み、キリストに倣って父のこれまでの行いを改め、既存の教会や修道院を改修するとともに多くの聖所を新たに設けた。また尊大で悔い改めようとしないう者たちから武器を取り上げ、自らやその子、そして人々の安寧のために天候を占うことができたが、病と子の反乱に長きに渡って苦しんだ後、死に至ったのである。ルイは理想的な人物であって、統治者として問題は少なく、その治世において必ずしも大きな進歩は見えないが、間違いなく聖人のごとき天性の徳を示したのである。』³⁴

しかしアンドリユーによれば、このときブリマはルイに、リクールが言うところの「準＝登場人物」としての役割を与え、王の物語の「準＝筋立て」に沿った役割を与えているのだとし、典拠史料とは異なる追記・修正部分に注意をうながす。まず『ルイ伝』では父シャルルマーニュと子ルイとの関係が、次のように記されている。

「彼シャルルマーニュは自らのもとに、すでに良く馬に乗り、武具を身につけたこの王子を呼び寄せた。辺境伯たちは王国を守護するため、すなわちいかなる敵の遠征からもこの境界線を防御するためそこに留め置かれた。一方若きルイは、全き意思において、そのあらゆる権限に関して王に従い、彼と同じ年の若き者たちからなる軍勢を率い、ガスコーニュ風の衣装を身にまといPaderbornに到着した。彼はかの地に王とともにとどまった後、Ehresbourgに向かい、太陽が最も高い季節を過ぎ、暑さがやわらぎ、秋になるまでその地に留まったが。そこで王の許しを得て、冬期営宿の準備をするためアキテーヌへと戻ったのである。』³⁵

これが『シャンティイ年代記』になると、翻訳に際して記述内容を整理し、必要と思われる部

分には説明を付け加えている（下線部参照）。

「そのことのために王はアキテーヌに使いを送り、すでに良く馬に乗ることの出来る息子を自らのもとに來させた。さらに、その土地を守るべく残した辺境伯を除き、その軍勢の全てを招集した。このことについてはずでに述べたことであるが、ルイは、同い年の忠実な者たちからなる軍勢を引き連れ、ガスコーニュ風の衣装を身につけて王の面前に馳せ参じた。というのも、彼の父がそのように飾り、身につけることを望まれたからである。彼は王とともにHerisbourgに赴き、一夏が完全に終わるまでその地に留まった。それが終わり冬が来ると、アキテーヌに戻ることにについて王の許しを得たのである。』³⁶

さらに『王の物語』においては皇太子ルイの所領統治に関する適切な指示が確認されるときにも、父シャルルマーニュの命に忠実に従うルイの忠誠心が強調されている（下線部参照）。

「このことのために、王は自らのもとに來よう彼に命じた。彼はすでに成長し、良く馬に乗ることが出来るようになっていたのであるが、自らの王国のことについて助言者であるArnoulに委ね、この地を治めまた守るために辺境伯とバイイを残した。多くの者を引き連れて、王に命じられた場所に赴いた。また王の命に従ってガスコーニュ風の衣装を身につけ、彼、ならびに貴顕の者たちの子息で彼と同じ年の者たちが武装してHeriburgに赴いた。そこに9月の終わりまでとどまると、王に暇乞いをして、冬を越すためアキテーヌに戻ったのである。』³⁷

次の例もまた同様である。まず『ルイ伝』ではシャルルマーニュからザクセン遠征への参加を求められながらも結局間に合わなかったルイについて、以下のように記す。

「再び夏が来ると、いと輝ける皇帝シャルルはザクセンに入り、子に対して、自ら

に付きしたが、当地で冬を越す準備をするよう求めた。王ルイは急ぎ彼に従うこととし、Nuitzに赴き、そこからライン河を渡って彼のもとに急いだ。しかし皇帝のもとに辿り着かないうちに、Ostphalieと呼ばれる場所で父からの伝令に会い、これ以上先には進まず、この地で宿営して皇帝の帰還を待つように求められた。実際ザクセンの民は完全に制圧されており、勝者たる皇帝シャルルは帰還の途にあったのである。帰還に臨んで息子が駆け寄ると、皇帝は自らの腕で固くその子を抱き寄せ、多くの感謝と賞賛の言葉を発し、彼の忠実さがいかに有益であったか、そしてこのような子を持っていかに幸せであるか語った。』³⁸

次に『シャンティイの年代記』では、内容は『ルイ伝』に忠実であるが、「皇帝」「王」をそれぞれ「父」「息子」に置き換えることで、皇帝=国王の忠誠関係よりも、父子の絆の強さが強調されてくる（下線部参照）。

「新しい季節が来て、鳥が鳴き花が咲き乱れると、いと力強い皇帝シャルルマーニュは、ザクソンに赴くべく軍勢を集め、その子に対して自らとともに来て、彼の地においてこの冬を過ごす準備をするよう求めた。ルイは、彼の父に従うことを望んでいたので直ちにまっすぐNeuceに赴き、ライン河を渡った。出来る限り早く会うことをその父が求めていたからである。しかし父に会う前に、父からの伝令に会い、父を追ってこれ以上進まないよう告げられた。高貴なる皇帝は、ザクセンとの戦いに勝利したので急いで戻り、その子に会った。父は子を見ると、彼は微笑みかけ、長く子を抱き寄せ、感謝の言葉を与えた。そしてその忠実さと奉仕の大きさを称え、神がこのよう子を授けてくれたこてゃいかに大いなる喜びであるか、繰り返して語ったのである」³⁹

この部分は『王の物語』では以下のように記されている。

「また春が巡ると、皇帝シャルルマーニュは、ザクセンに遠征すべく準備を始めた。彼は子に対して自らにつき従うよう、そして彼の地において冬を過ごす準備をするよう命じた。子は父の命を受けて、Neusieに赴き、ライン河を渡った。急いで彼の父に従おうとしていたからである。しかし彼は父に会う前に、Ostphaleという場所で伝令に会った。伝令は、父が彼に対してこれ以上進まず、その地に止まっているよう命じている、なぜなら、すでに皇帝が敵に対する大いなる勝利を得て帰還の途にあり、彼が先に進む必要がなくなったからである、と伝えた。」⁴⁰

『王の物語』も基本的には典拠史料に忠実に、父に対する子の従順さを示すものとしてこのエピソードを位置づけている。しかし皇帝からの命令が伝令によって変更されたところを記す際、ブリマは前二書とは大きく異なっている。『ルイ伝』では、伝令がもたらしたこの指示に対して、著者による補足説明という形で読者が抱くであろう疑問には回答がなされているが、物語中のルイ自身は、そこに一切の疑いを差し挟んではない。『シャンティイの年代記』には説明そのものが省略されている。対して『王の物語』では伝令の命令に当然疑問を抱くであろうルイが、「なぜなら…」という理由を自ら知り、理解する様子が描かれている（下線部参照）。ここには、登場人物に現実的かつ合理的な行動をとらせようとする編者の明確な意図が働いており、前節で確認した「神意ではなく人意によって織りなされる歴史」というこの作品の基本的な姿勢が、個々の叙述にも反映されていることを示している。

むすびにかえて

『王の物語』の編纂構造に関する分析は、直接的には世俗的「国家史」叙述の生成・変容過程の解明に関わる。この課題は、ナショナル・

アイデンティティ形成史の観点から設定されたものである。しかし本稿の検討から示されるように、初期「国家史」としての『王の物語』は、歴史を語るその叙述スタイルにおいて、先行する「教会史」に典型的なキリスト教的（あるいはユダヤ教的）歴史叙述の伝統を継承する部分も多かった。また他方で、論理実証主義のもとで一定の様式を生み出してきた近代以降の歴史叙述をすでに先取りするような試みもそこには確認される。とすれば、歴史叙述全般を対象に「歴史は何をどう記してきたのか」あるいは「歴史は何を記すべきか/記すべきでないのか」という問いを投げかける、近年のいわゆる「物語り論」の構想に対しても『王の物語』の分析作業はひとつの視座を与えるように思われる⁴¹。「はじめに」で言及した二つの論集が目指すところはまさにこの点にあった⁴²。

「歴史家は権力によってお墨付きを得、歴史叙述の生命力は権力の強度に左右される一方、権力は歴史家の語りによって正統性を証し、その権能を強化する」というルイ・マランの発言に見られるように、中世であれ現代であれ、歴史叙述は言語表象と政治的権力が交叉するところに生まれる⁴³。ただ現代とは異なり、中世の歴史家は「万能人」であった。代表的な例として、今回取り上げた『王の物語』を生み出したサン＝ドニ修道院の修道院長シュジェールを挙げることができるだろう。彼は何よりもまず聖職者であり、サン＝ドニ修道院の院長であったが、フランス王国における当代随一の政治家として王の顧問を務め、大学人、外交使節、さらには、王国各地に分散するサン＝ドニの所領経営者として、さらには後に建築史を画することになる、いわゆる「ゴシック様式」の修道院を構想、建立している。その彼がアーキビストとして修道院文書の管理にあたりながら歴史家として紡ぎ出したのが『ルイ肥満王伝 (Gesta Ludovici regis cognomento grossi)』であり『ルイの子、王ルイの事績について (De glorioso rege Ludovico, Ludovici filio)』であった⁴⁴。彼

には自らの業績を回顧する『統治中になされた事どもに関する書 (Liber de rebus in administratione sua gestis)』という著作もある。彼自身は年代記的な作品を残してはいないが、その歴史叙述は現実社会ときわめて近いところにあった。

これに対して現代の歴史家は、政治とは一定の距離を保ったアカデミズムのなかで、歴史学の「社会的有用性」という言葉に過敏に反応しつつも、アーカイブズ学や系統文献学あるいは「史料論」などの方法論的問題提起を受け止めつつ、自らの叙述が孕む政治性に向き合おうとしている。しかし両者は立場や時代の違いを超えて、「詩的真実」と「歴史的事実」をいかに調和させて読者に「政治的真実」を提示するかという難題を抱えており、実際その叙述スタイルには共通するところも多いように思われる。中世史書の分析によって得られる知見は、われわれ自身の現代の歴史叙述の在り方を考える上でも多くの示唆を与えるものとなるだろう。

注

¹ 2008年に限定しても、中世年代記に関する国際的な研究集会が二カ所で開かれている。ひとつはベルファスト大学の「第五回中世年代記に関する国際研究集会 (Fifth International Chronicle Conference (Queen's University Belfast))」[7月21日-25日]であり、もうひとつはケンブリッジ大学で7月に開催された「ケンブリッジ国際年代記シンポジウム (Cambridge International Chronicles Symposium)」[7月11日-13日]である。またフランス国立史料学研究所 (IRHT) は、2007-2008年度の共同研究テーマとして「古代末期から中世にかけての年代記」を取り上げている。さらに2009年には「中世年代記に関する国際研究集会」を主催しているエリック＝クーパーを中心とした研究グループにより、『中世年代記事典 (Encyclopedia of the Medieval Chronicle)』の刊行が予定されている。

² 言及は枚挙にいとまが無いが、日本史、中国史、イスラーム史の各研究分野における主な発言を

以下いくつか紹介しておきたい。「とりわけ重要なことは、歴史叙述のあり方の考察を通して、学問としての歴史学がいかんして形成され発達されたかを跡づけ解明することである」（稲葉一郎『中国史学史の研究』京都大学学術出版会、2006年。）「歴史書の執筆をはじめ、他の歴史書の参照、君主への献呈、聴衆の前での読みあげ、写本の作成・流布といった一連の「歴史叙述行為」を、歴史家による「社会的実践」としてとらえることで、彼らが歴史を書く（語る）ことの効用を考察した」（中町信孝『アイニーに帰せられた4年代記の成立年代と執筆意図』『西南アジア研究』No.65, 2006, pp.41-55.）「歴史は…支配者がいかなる出自を持ち、自分たちとどうつながっているか、国家がどれほど由緒正しい謂われをもつかということが確認されることによって、安定した持続が可能になるのである」（三浦佑之『古事記のひみつ 歴史書の成立』吉川弘文館、2007年。）「幕府自身が自己の政権をどのように位置づけていたのか、あるいはどうしてこうした編纂物（『吾妻鏡』）をつくろうとしていたのか、といった点を探ってゆけば、幕府の性格がほのかにでもみえてくるのではなかろうか」（五味文彦『増補 吾妻鏡の方法 事実と神話にみる中世』吉川弘文館、2000年。）

³ Jean-Christophe Cassard, Élisabeth Gaucher et Jean Kerhervé (dir.), *Vérité poétique, vérité politique : mythes, modèles et idéologies politiques au Moyen âge : actes du colloque de Brest, 22-24 septembre 2005*, Brest, 2007 (以下 *Vérité poétique* と略記) : Amaia Arizaleta (éd.), *Poétique de la chronique : l'écriture des textes historiographiques au Moyen Âge (péninsule Ibérique et France)* (以下 *Poétique de la chronique* と略記), Toulouse, 2008.

⁴ 1274年にフランス国王フィリップ3世に献呈されたこの俗語版王国年代記は、国王シャルル6世治世以降ヨーロッパ各地に広く普及し、中世国家フランスにおける「正史」の地位を得る。しかし現存する120点以上のGCF写本の多くは14世紀後半～15世紀制作されたものであり、1274年から、国王シャルル5世（在位1364-80）の指示で大幅に内容を改訂、拡充した新しいGCFが完成する1375年（1350年までの記述を含むこの

年代記を、以下「シャルル5世のGCF」と略記）までに制作されたと想定される写本の数はずか19点に過ぎない。「正史」化に向けた一連のプロセスにおける世界年代記『歴史の鑑』との「競合」関係を概観したものとして、拙稿「中世フランス王国の歴史・国家・世界観—『歴史の鑑』と『フランス大年代記』—」森田武教授退官記念会編『近世・近代日本社会の展開と社会諸科学の現在』新泉社、2007年、475-495頁。初期「普及」過程を分析したものとして、拙稿「『フランス大年代記』の普及とフランス・アイデンティティ—パリ国立図書館写本fr.10132を巡って—」『埼玉大学教育学部紀要（人文・社会科学）』第54巻-2号、2005年、1-11頁。「シャルル5世のGCF」に向けた「再編」過程の一側面を照射するものとして、拙稿「『フランス大年代記』とナショナル・アイデンティティ—歴史叙述研究を巡る最近の動向から—」『西洋史研究』新編第36号、2007年、21-41頁をそれぞれ参照。

⁵ Franck Collard, *Un historien au travail a la fin du oaf siecle : Robert Gaguin Travaux d'humanisme et Renaissance*, Geneva, 1996, pp.89-91 ; Françoise Cœur, *Le libraire-imprimeur Pasquier Bonhomme et son édition des « Grandes Chroniques de France », Positions de Thèse de l'École des Chartes, Paris, 1944*, pp.31-38.

⁶ Eléonore Andrieu, *Exercices de style : amplification de la forme et amplification de la matière dans deux chroniques des rois de France (XIII^e siècle)*, *Poétique de la chronique*, pp.153-192 (以下 *Exercices de style* と略記)。

⁷ Dom Bouquet, *Recueil des historiens des Gaules et de la France (Rerum Gallicarum et Francicarum scriptores)*, t. 3, Patis, 1741, p.viii. その結果ドン＝ブーケが着手し18世紀以来の伝統を持つ碑文文芸アカデミーの『ガリアならびにフランス史家選集 (Recueil des historiens des Gaules et de la France)』において、中世フランス王国を代表する王国年代記、いわゆる『フランス大年代記 (王の物語)』が採択されることはなかった。ジャン・マリー＝メーグランによれば、このエピソードは「中世年代記にとって、まさにサン＝バルテルミー（の大虐殺）であった。」Jean-Marie Moeglin, *L'Historiographie moderne*,

p.310.

- ⁸ Jean-Marie Moeglin, L'Historiographie moderne et contemporaine en France et en Allemagne et les chroniqueurs du Moyen Âge, AUTRAND France, GAUVARD Claude et MOEGLIN Jean-Marie (reunis), *Saint-Denis et la royauté. Etudes offertes à Bernard Guenee*, Paris, Publications de la Sorbonne, 1999 (以下、*Saint-Denis et la royauté* と略記), pp.301-338. Gabrielle M.Spiegel, The chronicle tradition of Saint-Denis, a survey, Leyden, 1978.
- ⁹ *Le Trésor de Saint-Denis : [exposition] Musée du Louvre, Paris, 12 mars - 17 juin*, 1991, Paris, 1991.
- ¹⁰ Gabrielle M.Spiegel, *The Past as Text : The Theory and Practice of Medieval Historiography*, Baltimore and London, 1997.
- ¹¹ Natalis de Wailly, Examen de quelques questions relatives à l'origine des Chroniques de Saint-Denis, *Mémoire de l'Institut royal de France, Académie des inscriptions et belles-lettres*, t.17, 1er partie, pp.379-407.
- ¹² 中世における俗語作品の冒頭部に関する最近の研究は、この前書き部分も基本的にはそれ以前のラテン語史書に範をとっていることが明らかにしている。*Seuils de l'oeuvre dans le texte médiéval*, Paris, 2002, 2vols ; *Les Prologues médiévaux, Actes du colloque international (Rome, 26-28 mars 1988)*, Turnhout, 2000.
- ¹³ 〈À son très chier seigneur, le très bon cretien, la très vaillant persone, conte de Poitiers et de Tholouse, cil qui ses sergenz, ses menestreus et ses obéissanz, qui a ceste oeuvre translatee de latin en françois, encore soit-il poi digne de lui saluer, saluz en Jhesu Christ.〉 Natalis de Wailly, Examen de quelques questions relatives à l'origines des Croniques de Saint-Denis, pp.405.
- ¹⁴ 〈Cil qui ceste ouvre commence à touz ciaux qui ceste hystoire liront saluz en Nostre Seigneur. Pour ce que pluseurs genz doutoient de la genealogie des rois de France, de quel original et de quel lignie ils ont descendu, enprist il ceste ouvre à fere par le commandement de tel home que ils ne pout ne ne dut refuser. ...Si sera ceste hystoire descrite selon la lettre et l'ordenance des

croniques de l'abaie de Saint Denis en France, où les hystoires et li fait de touz les rois sont escrits, car là doit on prendre et puisier l'original de l'estoire.〉 Jules Viard (éd.), *Le Grandes Chroniques de France*, Paris, 1927, t.I, prologue, pp.1-2.

- ¹⁵ Monique Goullet, *Écriture et réécriture hagiographiques. Essai sur les réécritures de Vies de saints dans l'Occident latin médiéval (VIIe-XIIe siècle)*, Turnhout, 2005 ; Michel Zimmermann (éd.), *Auctor et auctoritas : invention et conformité dans l'écriture médiévale. Actes du colloque de Saint-Quentin-en-Yvelines, Paris*, 2001.
- ¹⁶ 〈Si il puet trouver es croniques d'autres eglises chose qui vaille à la besoigne, il i pourra bien ajouter selonc la pure verité de la lettre, sanz riens oster, se ce n'est chose qui face confusion, et sans riens ajouter d'autre matiere, se ce ne sont aucunes incidences〉, *Grandes Chroniques*, t.1. Prologue, p.2.
- ¹⁷ 「私は準＝筋立てということばを用い、それによって個人的決断の結果の因果性的説明というオリジナルな例から出発して、個別的因果帰属の類比的性格を示したいと思う。」ポール＝リクール (久米博訳) 『時間と物語』 (全三巻) 新曜社、1987年-1990年 (新装版2004年)、I - 330頁。
- ¹⁸ Pascale Bourgain, Clovis et Clotilde chez les historiens médiévaux, des temps mérovingiens au premier siècle capétien, *Bibliothèque de l'école des chartes*, t.154-1, 1996, pp.53-85 ; Pascale Bourgain, La Protohistoire des Chroniques latines de Saint-Denis (BNF, lat.5925), *Saint-Denis et la royauté*, pp.375-395.
- ¹⁹ この史書の写本は現在この二点のみ現存しており、より完全な形で残っているコンデ美術館の写本 (Chantilly, 869) から、差しあたり『シャントイイ年代記』と呼ばれている。この年代記の基本的性格に関する通説的理解については、Gillette Labory, *Essai d'une histoire nationale au XIII^e siècle : la chronique de l'anonyme de Chantilly- Vatican, Bibliothèque de l'école des chartes*, t.148, 1990, pp.301-354.
- ²⁰ 翻訳としては、兼岩正夫・葦幸夫訳『歴史十巻 フランク史』 (全2巻) 東海大学出版会、1975-77

年および杉本正俊訳『フランク史 十巻の歴史』新評論、2007年。また『歴史十書』の成立過程、内容構成について分析したものとして佐藤彰一『歴史書を読む「歴史十書」のテキスト科学』山川出版社、2004年。

²¹ グレゴリウスの『歴史十書』が、ウェルギリウス以来の伝統を持つラテン的歴史叙述とは異なっていて、その執筆意図においてはキリスト教的救済観の拡大を目指しつつも、内容においては洗練とは無縁のきわめて雑多な構造を持つことをいち早く指摘したのは、エーリッヒ＝アウエルバッハである。エーリッヒ＝アウエルバッハ（篠田一士・川村二郎訳）『ミメシス ヨーロッパ文学における現実描写』筑摩書房、1967年（ちくま学芸文庫、1994年）、第四章「シカリウスとクラムネシンドゥス」

²² フレデガリウスの作品がどの程度オリジナリティを有しているのかという問題に関しては、この作品の現代語訳でもあるOlivier Devillers et Jean Meyers, *Frédégaire. Chronique des temps mérovingiens (Livre IV et Continuations)*, Turnhout, 2001、特にpp.5-57を参照。

²³ Eléonore Andrieu, L'histoire des rois des Francs dans les Grandes Chroniques de France : des confirmations du mythe à l'aventure généalogique, *Vérité poétique*, pp.23-46（以下L'histoire des roisと略記）。

²⁴ エモワンの作品は、Waitz, Georgeの手によって整理されMGH, *Scriptores*, 9に収められている。

²⁵ Eléonore Andrieu, L'histoire des rois, p.32.

²⁶ 〈Ci endroit nous covient touchier briement aucunes choses qui devant ont esté dites, pour plus plainement descendre à nostre matiere〉, *Le Grandes Chroniques*, t.III, livre 1, chap. 1, p.6.

²⁷ 〈Ci commence la vie et li fait dou debonaire Loos, fil Challemagne le Grant, qui fu rois et empereres. Mais, pour ce que il porta corone et fist aucuns granz faiz au vivant de son pere, nous convendra parler de Challemaine jusques ça en avant〉, *Le Grandes Chroniques*, t.IV, livre 1, chap. 1, p.7.

²⁸ 拙稿「『フランス史』の誕生—『シャンティイ年代記』から『フランス大年代記』へ」鶴島博和編著『歴史の誕生とアイデンティティ』日本経

済評論社、2005年、15－32頁。

²⁹ Eléonore Andrieu, Exercices de style, p.170.

³⁰ 〈mais je ne treuve mie en l'ystoire combien il vesquit, ne combien il regna, ne je n'y vueil rien mectre sinon ce que l'ystoire en dist.〉, *Chantilly*, fols. 4a-b.

³¹ Eléonore Andrieu, Exercices de style, p.172.

³² Sébastien Morlet, Écrire l'Histoire selon Eusèbe de Césarée, *L'information Littéraire*, 57, 2005, pp.3-15.

³³ Eléonore Andrieu, Exercices de style, pp.175-180.

³⁴ *Vita*, 19, 1-39, p.616.,

³⁵ 〈Il manda et fit venir auprès de lui ce prince qui déjà montait bien à cheval, avec toute son armée, les comtes des marches étant seuls laissés pour la protection des frontières du royaume et pour les garantir de toute expédition ennemie. Le jeune Louis, obéissant docilement de toute sa volonté et de tout son pouvoir, parvint à Paderborn, suivi d'une troupe de jeunes gens de son âge, vêtu de l'habit gascon...cela avait été commandé par le plaisir et la volonté du roi. Il resta donc avec son père, allant jusqu'à Ehresbourg avec lui, jusqu'à ce que le soleil, quittant l'axe du zénith, adoucisse l'ardeur estivale en imposant le déclin automnal. À ce moment-là, ayant reçu l'autorisation de son père, il retourna prendre ses quartiers d'hiver en Aquitaine〉, *Vita*, 4, 12-16, p.609.

³⁶ 〈Pou ce il envoie en Aquitaine et fist venir son filz a lui, qui chevauchoit des ja bien, et vint o toute sa chevalerie, fors seulement les marquis qu'il laissa pour garder sa terre. Si comme je vous ay dit, Loys vint a l'encontre de son pere en ung lieu qui fut nommé, et amena avec lui en sa compaignie ses gentils hommes de son aage, et vint devant son pere vestu en maniere de gascon...Car son pere l'avoit en telle maniere fait atourner et vestir pour son desduit seulement, comme celui qui le vouloit veoir en tel habit. Avec son pere, ala jusques a Herisbourg et demoura avec lui pres que tout l'esté jusques es mastives. Et quant la fin de ce temps se approucha et quant l'yver vint, si lui donna congé de s'en aller en Acquitaine〉, *Chantilly*, fols. 197b-198v.a.

³⁷ <Pour ce, li manda que il venist a lui. Li enfes qui ja estoit granz et bien chevauchez ordena de son roiaume au conseil Arnoul son mestre et lessa es provinces et es marches contes et baillis pour la terre gouverner et defendre, se besoinz fust. A granz genz mut et vint a son pere là où il le manda. En habit gascon estoïy atornez, si comme li peres l'avoit commandé, il et autres enfant de son nage, fiuz de nobles homes qui avec lui chevauchioient par compagnie... Avec le pere demoura une piece dou tens, et ala avec lui jusques à Heriburc. Quant li estez fu auques trespasez et ce vint vers le tens de septembre, il prist congïé au pere et retorna pour yverner en Auitaine>, *Le Grandes Chroniques*, t. IV, livre 1, chap. 1, p.10.

³⁸ <Quand l'été fut revenu, le glorieux empereur Charles passa en Saxe, et demanda à son fils de la suivre et de se préparer à passer l'hiver en ce pays. Le roi Louis, se hâtant de lui obéir, vint jusqu'à Nultz, traversa là le Rhin, et continua en hâte sa course vers son père. Mais avant qu'il n'atteigne son père, il rencontra dans le lieu nommé l'Ostphalie un courrier de son père qui lui demandait de ne pas avancer plus loin, de choisir au contraire un endroit propre à établir un camp et d'y attendre son retour. En effet, la nation des Saxons ayant été entièrement soumise, l'empereur Charles, vainqueur, revenait déjà. Et, tandis que son fils courait à sa rencontre, il l'embrassa en le tenant très étroitement dans ses bras, lui adressa beaucoup de marques de remerciements et des louanges, redisant souvent combien était utile son obéissance (obsequelae), et se vantant d'être heureux d'avoir un tel fils.>, *Vita*, 11, pp.611-612.

³⁹ <Et quant ce vint au temps nouvel que les oysaulx chantent doucement et que toute chouse s'esjoyst pour le temps, le rosier florist. Charlemagne, le puissant empereur, ot appareillez ses grans osts pour aler en Sessoigne et mand son filz qu'il alast empres lui, aussi appareillé come pour sejourner cel yver en celle terre. Et Loys, qui du tout vouloit estre obeissant a son pere, vint incontinant droit a Neuce en une ville ou il passa le

Rin. Et son pere vouloit aller a l'encontre au plus hastivement qu'il pourrot. Mais ains qu'il fust a son pere, il rencontra le message de son pere qui lui venoit dire qu'il ne se travaillast plus a lui suivre, ains fist logier ses gens en ung lieu convenable et l'actendist la tant qu'il fust revenu.>, *Chantilly*, fols. 200a-b.

⁴⁰ <Quant il prinstens renovela, Kallemaine li empereres s'apareilla pour ostoier en Saisoigne. A son fil manda que il le suivist et que il s'apareillast ausi comme pour demourer tout l'yver en la terre. Li fiuz fist le commandement dou pere, à une vile vint qui Neuscie avoit non, le Rim trespasa et se hasta moult de sivre son pere. Mais avant que il venist jusques à lui, il encontra un message en un lieu qui a Ostephale, qui li dist que ses peres li mandoit que il ne se traveillast en avant et tendist ses herberges en aucun convenable lieu et l'atendist là, car il n'estoit pas mestiers que il se traveillast en avant, pour ce que li empereres s'estoit ja mis au retor a grant victoire de ses anemi,s.>, *Grandes Chroniques*, t.IV, livre I, chap. 3, p.19.

⁴¹ 『王の物語』の叙述スタイルとの関係において本稿でも部分的に紹介したリクールやアウエルバッハに影響を受けた、アーサー＝ダントーやヘイドン＝ホワイトをはじめとする1970年代以降の「物語り論」を整理したものとして、鹿島徹『可能性としての歴史 越境する物語り論』岩波書店、2006年および野家啓一『物語の哲学（増補版）』岩波書店、2005年、さらに野家啓一『歴史を哲学する』岩波書店、2007年。

⁴² *Poétique de la chronique*, introduction.

⁴³ Louis Marin, *Le Portrait du roi*, Paris, 1981 (渡辺香根夫訳『王の肖像』法政大学出版局、2002年)。

⁴⁴ 森洋訳・編『サン・ドニ修道院長シュジェールルイ六世伝、ルイ七世伝、定め書、献堂記、統治記一』中央公論美術出版、2002年。渡辺節夫「シュジェールとその時代の王国観-『ルイVI世伝』の分析を中心として」『人文学系研究叢書（青山学院大学）』、第13号、1999年、55-83頁。

(2009年9月30日提出)

(2009年10月16日受理)